

読者という神

——『哀れなハインリヒ』における「罪」について——

尾 方 一 郎

1 はじめに——物語世界と歴史的世界

物語というものを理解しようとするとき、しばしば我々の歴史的世界と対応させて意味付けが行なわれる。もちろん生活にとって現実的な教訓を教えるために書かれた寓話ならそれも無理はない。しかし、一見実用的な教訓を含んでいそうにないもの、ふつうの意味では現実的とはいえない（つまり啓蒙パンフレットとは違った種類の）物語にも、現実との対応が求められるとすれば、それはどういうことだろうか。

勿論物語の世界は現実世界と同じ構造ではないということは、一般に認められているだろう。浦島太郎が竜宮城に着く前に亀の背中で溺死しないか心配したり、玉手箱の煙の成分を科学的に追求したりは余りされていないし、実際余計なことである。

しかし例えばハルトマン・フォン・アウエの『哀れなハインリヒ』になると、読む者にこうした対応を付けさせたいところがある、らしい。なぜ物語冒頭では申し分ない領主に見えたハインリヒがレプラにかかってしまうのか、そして自分の生き血で領主の病が治ると知った少女の申し出を一度は聞き入れ、しかし最後の瞬間に心の転回によって結局断ったハインリヒが、なぜその後見事に治癒してしまうのか。こうしたことが一旦問題とされると、これが書かれた頃の宗教理論つまりはキリスト教神学が精査され、転回以前のハインリヒにはいかなる非があるのか、あるいはないのか、以後のハインリヒはいかなる点で善しとされるのか、されないのか、熱心な議論の的に

なっていた時期がある¹⁾。

従って、1967年のEndresは『『哀れなハインリヒ』の騎士がsuperbia [高慢]の罪の為に、レブラによって罰せられたということは、多くのハルトマン研究者には、全く自明なこととされている』²⁾と書き始め、また1971年のSeigfriedは、『『グレゴリウス』と『哀れなハインリヒ』における罪と贖罪について、多くのことが書かれてきた。しかし結局、歴史的な諸連関に関する豊富な知見をもってしてもこの問題は解決されず、その罪がいかなるものか把握されないままである』³⁾と書き起こしている。

以下で見るようにそうした議論も理由のないことではない。しかしここでのハインリヒの在りように罪を見ようとして神学で説明する試みは中々うまく行かず、少なくとも、幅広い支持を得る結論には達しなかった。

2 ハルトマンのリアリティ

これに代わるのが、教説ではなく、ハルトマン自身の罪観念について究明しようという道である。ただし、これにも困難がある。以前の拙論でも触れたが⁴⁾、ハルトマン・フォン・アウエという詩人は、その名が作者として冠されたいくつかの作品の作者として主に知られており、それ以外には、別の詩人による言及くらいしか存在の典拠はない、つまり実在感が相当に稀薄な人物である。勿論、歴史上の人物として存在したことを疑おうというのではないが、その名が非常に文学的な経路でしか伝わらず、その点ではドン・キホーテのような作中人物の名と大して違わないのではないか、ということである。

いや、ドン・キホーテは架空だが、ハルトマンはあくまでも実在の人物だ、という言い方もあろう。それは言い換えればハルトマンの存在の方にずっとリアリティがあるということである。だがそのリアリティの内実を探った時、作品の登場人物より作品の作者の方が実在度(?)が高いという思考習慣の結果でないと言い切れるだろうか。実際、作者ハルトマンの名が知られているのも、作品の冒頭で多く自ら名乗っているからであって、文学作品中の名

前という点では作中人物と大差がない。

無論これは、着実な史料研究によって、実在人物ハルトマンの姿を徐々に明らかにしていこうという努力を軽視するものではない。しかし今のところ、ハルトマンという存在自体、文学作品のある一つの構成要素という様相を決定的に脱するまでには至っていないように思われる⁵⁾。

文学の世界では、存在のリアリティが、物語内のリアリティに依ってしまうところがある。実在人物でさえ、物語的エピソードが強力な存在感を示すと文学的存在になり、卵を立てたコロンブスやリンゴが落ちるのを見たニュートンのように、虚像が実像を覆ってしまうことがある。ハルトマンのリアリティも、結局読者が受けた印象に依るということは、当然のことではあるが、一応確認しておかねばならない。

さてでは作者とも言わず作中人物とも言わず、ただ人物とハルトマンを呼んでみるとして、そのハルトマンの存在のリアリティはどの辺にあるだろうか。

Ein ritter sô gelêret was / daz er an den buochen las / swaz er dar
an geschriben vant : / der was Hartman genant, / dienstman was er
zOuwe. (v.1-5)

たいそう学識深い一人の騎士がいて、書物に書かれていることは、何でも読んでいた。彼はハルトマンという名で、アウエの領主に仕えていた。

冒頭、作者の自己紹介と考えられている部分であるが、しかしそれは一人称でなく三人称で書かれ、その意味ではハルトマンはむしろ作中人物として存在し始めると言える。それでもこれが、自己紹介と考えられるのは、

そこ〔書物〕から彼は、心楽しまぬ時にそれを和らげ、〔…〕また自分が世の人々に愛顧を受けられるような物語を探した。今から彼は皆様に、

自分である書物から見つけた物語をお伝えしようとする。まず自分で名乗ったのは […] (v. 10-18)

…と語ることによって、結局この物語をここにある形で書いているのがそのハルトマンだと示しているからである。

しかしこれは、『哀れなハインリヒ』という作品を形式面から見る限りでは、その外側にいる作者ハルトマンの存在証明には全くならない。ハルトマンという名前を持たない人物がこう書くことも、理屈の上では同等に可能だからである。

ここで見えるのは（シュティフターの『水晶』に関する前稿⁶⁾で述べたような意味の）書き手、つまり文学作品の内側から眺めた時に、その外の世界との界面に張り付いている存在でしかない。それがしかし一般に作者としてもっと豊かな存在を認められているからには、厚みを持たない影の如きものでなく、ある（例えば身体的な）厚みを持って外部世界に張り出して見えるようなリアリティを備えているはずである。しかしそれは既述の通り言及からの論理的帰結としてではない。むしろこのテキストを読む読者が、そうした身体性とでも言うべき厚みをハルトマンに要請あるいは想定することによるだろう⁷⁾。

そうした厚みを何処から想定したくなるかは、人により違うかもしれないが、筆者には「自分が世の人々に愛顧を受けられるよう」というような科白が相当目につく。こうした自己愛的な言葉は、むしろ言わずもがなで、却って読者の不興を買いかねないが、そうしたある種の不透明さないし屈折がある箇所の方が、むしろリアリティを持つように思われる。

なお念の為に言えば、この書き手は作品の語り手とは別である。この作品が、「今から彼 er は皆様に、自分である書物から見つけた物語をお伝えしようとする」と語り始められ、そしてその er が Hartmann (4) を受けている点では、語り手もやはりハルトマンと呼んでもよい。だがこれは既に（前稿で述べた通り）、作品を我々が読み始めるまで声は聞こえず、したがって

存在もできない作品内の人物である。従って本稿ではこの人格については語り手と呼んで区別しておく。

3 ハイน์リヒの「罪」

話を本筋に戻す。作者ハルトマンとは、第一には読者の想定に依って現われる存在であって、それ以外の経路で見える部分は少ない。この状態で、例えばハルトマンの宗教観から作品を見ることは、作品からハルトマンの人物を解釈し、その人物から作品を解釈するという循環に陥りかねない。これを避けるには、歴史的存在としてのハルトマンをその時代に定位させるに足る知識と方法論が必要だろうが、それは今後の課題である。ここでは、ハルトマンという人格をその作品世界の外界との接触面にある書き手のことに限っておく。そしてその了解の上で、ハルトマンの『哀れなハイน์リヒ』における罪を考えたい。

だがそれは、作品世界の中に罪とそれに対する神の罰という因果関係を想定して、ハイน์リヒが病に陥った〈理由〉を求めることではない。

確かにテキストの中にはそうしたくなる箇所がある「彼〔神〕の御心によって von sinem gebote, 最高の身の上から、みじめな苦難に突き落とされた」(116-8) というところがその一である。もう一つは「人々が神の重い罰 zuht を彼の身に見て取った時、男達にも女達にも、彼は嫌悪されるようになった」(120-3) という言明である。ここから、何かは分からないがハイน์リヒに罪があって、その罰として病が課されたのだろうと読みたくなるのは理解できる。

しかし、ではその罪は何かと具体的に探すことには、幾つかのレベルで無理がある。

まず第一には、研究史が示す通り、病に見舞われる前のハイน์リヒには普通の宗教観念で罪とみなせる点が見当たらないことである。このことから我々は、語り手が「神の御心」とか「神の罰」と言う時に、それが文字通りの事を意味しているのか、それともレトリックの一つかを問わねばならない。

それは我々が現実に「天罰観面」などと人のことを言う時に、どのくらい「天」と「罰」を信じているかというようなことである。勿論言った当人は信仰心が篤く、「天」を信じているかもしれないが、それなら今度はこの発言がこの世の出来事の客観的な説明になってはいないということにも注意せねばならない（たとえ当人には説得力があったとしてもである）。ここで思い当たるのは、レプラが罰としての病だと誤って解釈されてきた過去の歴史である。現在の医学知識からは全く問題にならないが、ある病を見た時に、その病者に罪が想定されるという事実があったのである。罪というものは、法のような条件で規定されるものでもあるが、何か不可解な事が起きた時にその背後に想定されるものでもあるのだ。

そしてそのつもりで見ると、語られる言葉自体にも解釈に迷わされる点があることに気付く。神の gebot によってというのは、御心が罪に対するものという意味を含むだろうか。また「人々が神の重い罰 zuht を見て取った」というのは、単に人々がそう思ったということかもしれない。さらには、zuht という語義の広い単語を、「罰」と厳しくとって良いのかどうかも自明ではない。

もっとも罪を探するのは作中のハインリヒも同じで、病の原因について自己解釈（383 ff.）をしてしまう。しかしそれは、一條麻美子氏の論の通り、「『罪—罰—恩寵』という因果関係の線を描いているのはハルトマンではない。登場人物のハインリヒであり、ハインリヒ同様意味のない人生に耐えられぬ読者なのだ」⁸⁾ということであろう。

ではハインリヒに全く罪は見出されないのだろうか。

彼には病を課せられるべき「罪」はない。それは、現実世界で患者が「罪」によって病に陥るのではないのと全く同等である。

しかし、別の意味ではやはり「罪」があるのだろう。結論を一部言ってしまうと、それは彼が物語の登場人物であることにより、負わされるものである。人生に意味がないことも耐え難いが、物語に意味がないことはもっと耐え難い。意味がないと物語は存在意義そのものが危うくなるのだから。それ

ゆえ物語は意味を読み込まれてしまう。その結果ハインリヒが負わされてしまうもの、それこそ「罪」と言えば言えるものであろう。しかしそれは作品世界の中にあるものではない。作品という、言葉で作られた世界の外から読み込まれるものなのである。

4 ハインリヒの転回

従って「罪」を見る前に、作品の中に明らかに見られ、罪のイメージを生んでいるハインリヒの転回の方を見ておくのが順序であろう。

罪の所在は以前から議論が分かれているところであったが、病が癒える直前、彼が少女の犠牲を斥けたところに転回があるという点は、まず異論がないようである。(これは一般的には「回心」と言った方が通じやすいかもしれないが、「回心」といえばその前に悪を推定させかねないので、以前のハインリヒが悪いのかどうかははっきりしないという意味で、一応「転回」としておく)。そしてこの物語の論理は、その転回を神が善しとして病を癒したというものだ、ということもおおむね受け入れられているようである。

我々はこの転回と治癒の因果関係も置いておく。だが、転回そのものを見ることが出来る。少女の犠牲を目前にして、「新たな気持 niuwen muot」(1235)が湧き、「これまでの気持ち altez gemüete」が「新たな慈愛 niuwe güete」(1240)に代わった。そして「私はこの子の死を見ていられない」(1256)という辺りがその核心である。ここまでのハインリヒは、いろいろ思い悩みつつも、やはり究極的には自己中心という在り方から脱していなかった。しかしこのようにハインリヒが、自己以外から眺める決定的視点を持った。これは、彼の内なる転回である。ここで関わってくるのは、専ら自意識の問題である。それをこれからやや詳しく見ていこう。

5 物語の主人公の自意識

物語の主人公の意識が最も明快なのは桃太郎のようなものだろう。鬼という、とにかく明白に悪い奴がいて、それを退治すれば主人公の資格にかなう。

犬猿雉子も、黍団子一つで簡単に桃太郎の同志になり、手足の如く動いてくれるし、鬼退治には宝の山という実に明快な報酬がある。これこそ世界の主人公でありたい人間の根本欲求を非常にストレートに反映したものだろう。しかしこれ程明白な主人公対悪役でなくても、主人公が思い通りに振る舞い、たとえ傍迷惑でも反省などしないのは、物語の一つの型である。

ドイツ中世文学でいうと、『ニーベルングンの歌』では、ジーフリートはひかにひどくプリュンヒルトをあざむいても、目的のためなら良心がとがめることはなく、クリエムヒルトも復讐を決意すれば、殆ど皆殺しの惨事を招いてもとにかくやり通す。またアイルハルトの『トリストラントとイザルデ』も、一旦二人が恋に落ちてしまえば、マルケ王に対する申し訳なさなどは脇に置かれ、二人の逢瀬を邪魔する者は悪い奴という扱いになってしまう。こうした物語でも物事は無論彼らの思う通りになるとは限らないが、主人公は自己を中心とした論理に従って行動する、結果は運命が決めると見られているように思われる。

しかし一方で他者意識が問題になる作品があるのも、特にキリスト教的倫理が関わってくるときには、いわば当然のことである。だがその中でもハルトマンの『あわれなハインリヒ』は、主人公が些か特殊な意識の在りようを示す。

『ハインリヒ』は話形としては中世に多くあった「血の犠牲」というタイプの説話に類する。その大枠は、主人公が不治の病にかかって、治すためにはこれこれの人間が死んでその血を薬とするしかないというもので、それがさらに二つの類型に分けられるようである。一つは、病人が結局その犠牲を拒否して、そのことで神の恩寵を得て治るというもの。もう一つは、犠牲が受け入れられた後、犠牲者がその行為によって恩寵を得て生き返ったりするものだが、その一方で犠牲を受け入れた方は、一時的に病からいやされても、結局なんらかの形で神罰を被ることもある⁹⁾。

いずれにせよ、血の犠牲を受け入れるか、それとも自分がそのまま死ぬかというのは、究極の選択である。しかし、自己を取るか他者を取るかという

いわば地上の選択の外に、神という絶対の他者があって、地上で己を捨てた者が、神の恩寵というレベルでは、嘉すべきものとされるということならば、それなりの見通しがきく。しかし、『哀れなハインリヒ』はこの型からはずれたもので、(文学史上に残る作品になったのもそのせいかもしれないが)、心理学的になった近代小説に近づいているところがある。それは神の意図が何かということや、犠牲—恩寵という図式そのままでもない不透明さがあるからである。

まず主人公ハインリヒには、そうした見通しが物語の最初から塞がれている。「誉れや心根」(46)において極めて優れ、徳によって鑑ともされ人に敬われるものでもあるのに、突然レブラにかかる彼には何の説明も与えられない。「ヨブ記」との類似にしても、あちらには神とサタンの対話の結果試練が与えられたという外的な説明が一応あるのに対し、ここにはそれもない。ただ「彼〔神〕の御心によって von sinem gebote」(116)と言われるだけである。一方ヨブはなお神を称え続けたが、ハインリヒには「遺憾ながらそうはしなかった」(147)という違いもある。しかしこれを罪と言うには無理がある。(なおここで、「高貴な心／高慢 *höchmuot*」(82)、或は「誇り／慢心 *höchvart*」(151)というような、斜線で示すいずれにも取れる言葉が語られるので、論者によってはそこに罪の徴表を見たりするのだが、我々にとってそれは詮索すべきものでなく、むしろ見えなさを助長するように思われる)¹⁰⁾。

すっかり絶望した彼の唯一の見通しは、この病には治せる種類のものもあるというそれこそ一縷の望みである。だが、当時最高の医師がいたサレルノを訪れて聞いたのは何とも奇妙な話で、「これは治せるものだが、しかし決して治らないだろう、というのだった」(186 f.)。ハインリヒは当然不審に思い、「治せるものならば、私は治す」(190)。いくら金がかかろうが、苦しかろうが構わないと言うが、医師は、その薬は金でも買えず手を尽くしても手に入らない。結婚できる年齢の娘で、自ら進んで命を捨てる気になるもの

があれば、その心臓の血で治るのだが、と言う (224-232)。(なお、この結婚できる年齢という条件は写本で不一致があり、種々の修正案が出ている箇所だが、深入りしない。自分の意志に責任が持てる年齢という意味と考えておく)。

そこで諦めて帰るハインリヒは、大きな壁に目の前を塞がれている。いくら優れた主人公でもどうにもならない他者という存在である。他者の意志は、ことに他者の存在そのものに関わる場合には、自己とは全く隔絶している。「治せるものならば、私は治す」という科白は、そのような隔絶した領域の存在をまだ予期していない段階の言葉である。そして条件を聞いて諦めるハインリヒは、同時に、他者が結局は他者であることに気づいて諦めるのもあるだろう。当時あった、子供の血が病に効くという型の話には、本人の意志を問題にしない(=親が決断する)ものもあるようだが、ここでは「自ら進んで」というのが治癒の条件に加わっている。他者の壁は否応なく際立たされている。

しかし物語は、この閉ざされたハインリヒをそのままにしておかない。彼を救う他者が、訪れるのである。

6 娘の決意と説得

とはいえ、それは主人公救済のための道具のように、御都合主義的に現われる訳ではない。もしそうならそこで他者の問題は解消されてしまうのだが、ここではあくまでも他者である主体として、それどころか既に指摘もある通り¹¹⁾、一時的に主人公の地位に就く者として現われる。

病んだハインリヒの世話をした領内の農夫の家で、3年経ったところで(351)、農夫はその病気は治らないのかとハインリヒに問う。その背後には、この優しい領主が亡くなったら、自分達はどうなるかという心配もあった(359-365)。

これに対してハインリヒは、まず、かつての自分が世俗的な幸福(387)に向かっており、神の恩寵(394)に気もとめずらにいた、その罰がこの病だ

という自己解釈を語る。そして、「いかにお前が私を避けず、お前だけが私を大事に思ってくれ、お前の幸せな生活が私にかかっていると看做しても、それでもお前は私の死を耐え忍ぶことができるだろう」(422-5)と語る。他者との決定的断絶の認識である。

主人公の独り舞台形式の物語では、しばしば他者の死が容易に耐え忍ばれるが、立場が逆転すると、それは痛切な絶望となる。前半の自己解釈は、この絶望に辛うじて説明を加える試みに他ならないだろう。そしてハインリヒはサレルノで聞いた治癒の条件を語って、そのような娘がいるはずがない、むしろ早く死んでしまいたいと結ぶ。

ところが、ありえない決心をする娘が、現われるのである。

農夫の家でことに親身にハインリヒに仕えてきたこの娘は、初め(有力な写本の読みでは)8歳であるから(303)、このとき11歳である。その娘が話を聞いていて、二晩にわたり胸を痛め、ついに主君に身を捧げることを思い立った時、心が軽くなる(529 f.)。

この他者の現われは、ハインリヒから見れば、まさに奇蹟である。この物語が奇蹟譚だとすれば、病の治癒より、まずこの一点が中心だろう。

しかしこの決心があっても、物語の中で実行に至るまではまだ相当に困難がある。それをあくまで主体的に導く使命を帯びた少女は、ここからは物語を主導する者になる。その夜のうちこの望みを両親に打ち明けると、それは当然反対を招くが、しかしついに娘はまるで神懸かりになったように滔々と、ハインリヒが死んだ場合の家族の困難、地上の生活がいかにむなしいか、天上の生がいかに至福であるか等々を弁じたてる(663-854)。両親も、これほどの言葉が子どもの口から出るのは精霊の働きであろうと考え、願いを聞き入れる(855-902)。この少女の演説の中にある自己滅却による救済の論理と極端なまでの現世否定は、世界あるいは他者に対する恐怖という観点から見ることもでき、今回の主題と深く関連すると思われるが、ここではこれ以上立ち入ることができない。

話を聞いたハインリヒは、はじめ断る。しかし両親も認め(972-986)、ま

た少女が、ハインリヒに勇気がないと泣くほどなので (1007 f.), 申し出を受け入れる。サレルノでは、本当に自分の意志なのか、医師が娘に聞いたのですが、少女は、医師に勇気を持つように望み (1119 ff.), 「天国の冠」(1168) への期待を語る。

ついに医師も決心して、一室で少女を裸にして縛り付け、せめて苦しみをやわらげようと、メスを砥石で砥ぎはじめる。音を聞いたハインリヒは、最後に一目とあって壁の隙間から少女を見る。このとき。

「娘のからだは、いとも愛らしかった。ハインリヒが娘を見、自分を見ると、新たな気持ち湧いてきた。自分がこれまで考えていたことは、よろしくないと思われた。そしてたちまちのうちに、これまでの気持ちが、新たな慈愛 (niuwe güete) にか変わった」(1233-40)

ありえない他者の訪れに次ぐ、そして意義では決して劣らない新たな局面の立ち現われである。ふつう人間は自らの心の変化をそう名づけないが、やはり奇蹟と呼ぶのが相応しい、自意識の転回である。

もちろん、娘が命を救われたという平板な意味での奇蹟ではない。ハインリヒは、「神が私に課せられたものは、すべてそのままにしておこう」(1254 f.) と考え、医師に即刻中止を命じ、少女の縛めを解かせる。すると少女は「天国の冠」(1293) を失ったと嘆き、それでも聞き入れられないと、主君の「臆病さ」(1311) をののしるが、彼はもはやそのような言葉には動じない。これは神という存在を軸に考えると、神の試練は受け入れるべきであるという、ヨブと同じ位置に立ったことである。しかしそれが極めて人間的に行なわれるのである。中島悠爾氏は敢えて「常識的に見れば」と前置きしつつ、最後の瞬間、娘の裸のすがたを見たとき、ハインリヒが「激しい心の痛みをおぼえ、我に返ったというきわめて素直な人間感情の軌跡と読むことが、この作品を楽しむもっとも自然な読み方なのではないだろうか」¹²⁾とする。この視点は極めて穏当であろう。孤立した自意識の打破が、エロスという他者との融和を含む動機によって惹き起される。このような人間的な道で、ヨブ

のような類を絶する意識に達したこと、これを奇蹟と呼びたいのである。

これに比べれば、その非難を聞き入れず、少女を連れてハインリヒが国に帰る途上、いつの間にかキリストが二人の心底を見定めて、「二人をあらゆる苦しみから解き放ち、すぐさまハインリヒを清らかで健康な身とされた」(1367-70)ということは、最も重要な事ではなくなる。既に指摘のある通り¹³⁾、治癒の事実のみが淡々とした筆致で述べられるのも道理である。以後は急速に終結に向かい、ハインリヒがこの少女を妻として、二人で長く幸福な人生を過ごし、天国での永遠の生命をうける。物語は主題が解決した後には、問題を残さないように終わるのである。

7 文学としてみた『ハインリヒ』と読者

これまで見てきたように、これは「罪一罰一恩寵」の図式を当てはめるのがかなり無理な物語である。転回は明瞭であるが、そこに恩寵を見るとすれば、少女が自己を捨てたのに対し、ハインリヒも自己を捨て返したという点に理由を求める他ないだろう。そうだとすると、それ以前の状態に罪を認めるというのは、もし現実世界との平行関係で考えるとすれば、酷と言わざるをえない。しかし一方でハインリヒに罪が見られてきたという事は、歴史的事実として残っている。

こうした問題について中島氏は述べる。「中世の文学、中世の宮廷叙事詩を、社会史の、あるいは神学のテキストとして読もうとするとき、必ず現れる矛盾、非合理は何を意味するのか。それらの作品は、やはり、文学として読まれることを要求しているのではないのだろうか」¹⁴⁾。それこそ常識的で当然のような論であろう。しかし敢えてこう書かれねばならないほど、ハインリヒの罪という見方は吸引力が強かったのである。

これはやはり、「罪」というものが、作品の中で存在感によって、読者に見られてしまうということであろう。例えばハインリヒの自己解釈などが、論理上は全く罪の証明になっていなくても、そう見えてしまうのである。それは言い換えればリアリティがあるということだが、しかし例えば心理的に

言って現実的に見えるというようなことではない。むしろここでも見通しのきかなさや屈折が寄与しているだろう。

もし『哀れなハインリヒ』が、このような形でなく、もっと見通しのきく、分かりやすい物語に改作されていたら、われわれ読者にとってどうだろうか。例えば娘の熱心な願いが容れられて、見事業となる心臓の血が得られ、ハインリヒの病が治る一方、娘も救済されるという話ならば、意図は分かり易いが、物足りないものになりそうである。ハインリヒの治癒の願望、娘の自己犠牲による自己救済の願望が、「素直な人間感情」をかなり逸脱して突き進み、その直線性は読者には些か退屈でもあり、気恥ずかしくもあろう。

また、娘がいくら犠牲になると主張し懇願しても、ハインリヒが決して聞き入れなかった結果、神意にかなって病から救われるという話ならどうだろう。今度はハインリヒがあまりに高潔な別次元の人物になり、読者には一寸付き合いにくい、縁遠い存在ということになりそうである¹⁵⁾。

読者（あるいは聴き手）という存在は、作中の人物にとって超越的な位置に立っている。だが、同じく超越者である神とは違った、なかなか理屈では割り切れない判断基準を持っている。作中人物は、倫理的であればそれに越したことはないかもしれないが、あまり行きすぎると窮屈に思われてしまう。異性にもてるほうがいいのかと思うと、もてすぎると嫉妬される。智に働けば角が立つ。読者というのは大概はほとほどの人間で、かつそれなりの自己愛を持っており、この存在に受け入れられるというのは、かなり難しいことである。神というのはえてして抽象的・理想的に考えられる存在で、従って合理的であることを期待される存在だが、その神に受け入れられるより、読者という他者に受け入れられることの方が、合理的な判断基準が考えにくいだけに困難なことのように入る。

しかしその困難な課題を果たすのが文学作品とその主人公の課題である。それなしでは時間の選択に耐えて生き残ることが出来ない。生きのびる為に必要なのが存在感である。そしてハインリヒはその存在感を、「罪」という謎と共に保持してきたのだろう。

8 ハイน์リヒの神, 罪と赦し

さて、もし『哀れなハイน์リヒ』がそのような作品だとすると、ここで我々は、この作品世界の神というものを、別様にも考えられるのではないだろうか。つまり抽象的・理想的な考え方の神がいるのではなく、物語を外から読む読者、のような神がいるということである。そしてこの神から見れば、他の説話にあるような、直線的な行動をとる主人公よりも、このハイน์リヒの方が好ましい存在であり、嘉すべきものになるのだ、と考えられないだろうか。

この神はそれなりに主人公に肩入れする。だがそれなりに主人公に要求もする。最大の要求は、読み応えのある人物であれということだ。そのためには主人公が何らかの緊張関係の網の中に捉えられ、それが持続し、最後にそれが解決され、そしてその間の振幅がなるべく大きいことが必要である。その要求が病を得たハイน์リヒに罪を見て取らせたのであろう。

こうして考えてみると、ハイน์リヒの「罪」というのは、申し分のない主人公としてそこに居たというその一点、彼から言えばいかにも主人公らしい自意識を備えていたということではない。そして「救済」されるのは、少女という他者を自分と引き換えにできないということを悟ったことで、その自意識から離脱したこと、しかもそれが格好の良い理屈でなく、裸の姿を見たときの心の動きによってであった、そのことによるのではないだろうか。物語の中で、ハイน์リヒと少女の心底を見届け彼を癒すのはキリスト(1365)だが、その直前では「cordis speculâtor 心を見通すもの」(1357)とも呼ばれている。これは語り手の言葉に依りながら、人物の科白には現れない内心までも見通せる読者にこそ相応しい名ではないだろうか。

ハイน์リヒの神が、読者のような存在だとすると、彼はその神の前で物語の主人公であるという絶対の自己中心性を放棄することで救済される。主人公が物語中の他者を自己のために利用することもできない。かといって他者のために犠牲を払ってかえって自己救済されるということもできない(これ

は少女についても言えることである)。そうした自己中心性を妬む神が、ここにいるのだろう。

一方最後になるが、ハルトマンはどうだろう。彼は書くことによって「自分が世の人々に愛顧を受けられるよう」に願っていた。そして最初に名乗ったのは、「この物語に費やした苦勞を、何かの形で認めてもらい、自分の死後にこの物語を聞いたり読んだりする人々に、自分の魂の平安を神に祈って欲しいからである。聞くところでは、他人の罪の許しを祈願するものは、自分自身の代願人となり、自らをも救うということだから」(19-28)と言う。彼も読者という神に直面している。そして書き手としての自己主張のみ通したり、逆に一方的に媚びたりすることでは、善しとされることはできない。

ではどうすればいいのか。そこがまさに書き手の困難だろう。しかしこの課題を、どんな複雑な迂路を経てでも満たさなければ、彼は嘉されない。だが歴史上の作者ハルトマンはさておき、言葉の世界に住む書き手ハルトマンは、『哀れなハインリヒ』という、単なる説話に終わらず、今も熱心に読まれ論じられるような、つまり読み手という神に嘉納される言語作品が残ったこと、そのことによって救済されているのではないだろうか。

本稿は、1996年12月21日、東京大学文学部独文研究室に於いて行なわれた文部省科学研究費研究会での口頭発表の一部に基づき、大幅に加筆したものである。

テキストとしては、Hartmann von Aue: Der arme Heinrich, hg. von H. Paul, 14. Aufl. besorgt von L. Wolff, Tübingen 1972 (=ATB 3) を使用し、本文中の括弧内に行数を示した。翻訳に際しては次の現代独語訳、邦訳を参照しつつ、極力いわゆる直訳に近づけた。Der arme Heinrich. Übertragen von H. Henne, Frankfurt/M 1987 (Fischer TB 6488)。『ハルトマン作品集』(哀れなハインリヒ 相良守峯訳)、郁文堂、1982。

- 1) 二次文献については紙幅の都合で十分に挙げられないが、例えば下記の Cormeau/Strömer の書誌、また Endres の引用文献等を参照。
- 2) Endres, R.: Heinrichs höchst, in: Euphorion 61 (1967), S. 267-294, hier S. 267.

- 3) Seigfried, H. : Der Schuldbegriff im Gregorius und im Armen Heinrich Hartmanns von Aue, in: Euphorion 65 (1971), S. 162-182, hier S. 162.
- 4) 尾方: 救済の語り手と語り手の救済——『グレゴリウス』との比較で見た『選ばれし人』序論——, 「一橋論叢」第121巻3号(1999.3), S. 79-93.
- 5) Vgl. Cormeau, C./Strömer, W. : Hartmann von Aue. Epoche-Werk-Wirkung, 2. Aufl., München 1993, S. 16 ff. 他に例えば, Deutsche biographische Enzyklopädie, Bd. 4, München 1996, S. 404 f. の記述も同様である.
- 6) 尾方: 「書き手」の成功と作家——シュティフターの『水晶』について, 「一橋論叢」第123巻3号(2000.3), S. 19-33.
- 7) そこではおなじハルトマンに帰される諸作品での言及から, 例えばある時の十字軍という歴史と作者が結び付けられるのだが, そうして現われる作者と書き手の結び付け方は, 筆者にはまだ準備と能力不足のため分からない。今後の課題としたい。
- 8) 一條麻美子: 反「宗教叙事詩」としての『哀れなハインリヒ』, 「超域文化科学紀要」3(1998), S. 16-26, hier S. 25.
- 9) 上掲一條論文, S. 19 f. (日本でも『摂州合邦辻』のような, 血の犠牲の類話がある)
- 10) Endres 上掲論文を参照.
- 11) Cormeau/Strömer, S. 144.
- 12) 中島悠爾: 作品解題, 上掲『ハルトマン作品集』, S. 437.
- 13) 上掲一條論文, S. 24.
- 14) 中島悠爾: 上掲作品解題, S. 438.
- 15) 古澤ゆう子氏も, 「残酷な悪人」や「聖人的善人」は読者には縁遠く, 共感のもてないものとして, 「ハインリヒの態度はいかにも現実的である」とする。同: 哀れなハインリヒの回心, 「一橋論叢」第123巻3号(2000.3), S. 116-125, hier S. 121.

(一橋大学助教授)